最も重要な貢献の1つは，「コモンズの悲劇」の前後から続いている，資源管理の主体は政府か，地域共同体かといった二者択一的な議論やそれにもとづく政策を批判的に検討し，資源の権利と管理義務において国家と地域共同体は相互に関連しながら管理体制を構築してきたことを明らかにした点である．こうした指摘は，伝統／近代，地域共同体／政府，ローカル／グローバルといった二分法の間で揺れる開発の政策や言説を批判的に見直す重要な出発点となるであろう．

引　用　文　献

Ferguson, J. 1994. *The Anti-Politics Machine: Development, Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*. Cambridge: Cambridge University Press.

Li, T.M. 1996. Images of community: Discourse and Strategy in Property Relations, *Development and Change* 27: 501–527.

Sivaramakrishnan, K. 2000. Crafting the Public Sphere in the Forests of West Bengal: Democracy, Development, and Political Action, *American Ethnologist* 27: 431–461.

（七五三泰輔，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

百瀬邦泰．『熱帯雨林を観る』（講談社選書メチエ276）講談社，2003年，214p.

本書は熱帯雨林に関する基礎的情報を網羅したうえで，熱帯雨林保全をどのように考えるのかということを扱った一般向けの本という位置づけで執筆されている．著者は大学院生時代にマレーシアのランビル国立公園で研究を行い学位を取得した後，ランビルのみならず，中国雲南省やインドネシア・スマトラ島の熱帯泥炭湿地林をフィールドとして熱帯雨林の研究に従事している．本書では著者の熱帯研究歴はたかだか十年で大学院生時代に始まったと書かれている．著者は学部生時代から日本のあちこちのフィールドをまわり，熱帯研究を始めたときはすでに自然に関する深い造詣と知識を身につけていた．それらの経験をベースとして著者は熱帯研究に従事し，熱帯雨林に関する深い知識と造詣を深め本書を執筆するに至った．

本書を統一的に貫くテーマは，熱帯雨林の保全である．熱帯雨林は豊かな文化を創造し保持する機能があり，その機能がもつ価値ゆえに保全しなければならないと著者は強く主張する．これまでの熱帯雨林保全に関する議論では，直接的な熱帯雨林の機能（遺伝資源の宝庫・治水機能・地球環境の安定化）が重視されるあまりに熱帯雨林の文化的な価値が見過ごされがちであったという．このような主張は，著者が熱帯雨林において生物学的な現象だけに興味をもたずに，人間と熱帯雨林の関係に強く興味をもっているからなされたのであろうと読みとれる．本書では熱帯雨林の文化的価値の具体例を第1～3部に記述し，4部で保全の方法を模索している．

第1部では，熱帯雨林への案内として，熱帯雨林に関する基礎的な情報について解説を行っている．熱帯雨林を歩いていると目に入ってくる大型動物・イチジク・突出木についてだけでなく，ただ歩いているだけでは見

過ごされがちな土壌・ミツバチや，それ自身が生物ではないが，多様な生物が維持されている仕組みを説明する重要な林冠ギャップの動態について解説を行っている．

第2部では，熱帯雨林における生物の進化的背景・植物の繁殖と動物の相互作用・植物の一生・植物種間の多種共存機構について，全4節構成で解説を行っている．前半3節では，多様な生物が創出された理由についての記述が中心であり，最後の一部では生物多様性の維持機構についてのさまざまな説についての解説が中心となっている．多少専門用語が多い部分でもあるが，この部分をより深く理解したい人は「植物用語事典」［清水 2001］を片手に読むことをお勧めする．著者が本書を執筆中に私の本棚から借りていったのだから折り紙つきである．

第3部では，民俗生物学――現地に住む人々と自然環境との関わり――について植物に焦点をあて，ボルネオのイバンとスマトラのマレー人の事例を中心に記述している．そしてイバン・マレーの事例の最後に，それぞれの場所における森林破壊に関わる問題について記述している．この章は前章とはうってかわって専門用語も少なく，専門家でない人でも気楽に読める．

第4部は熱帯雨林をどのように保全したらよいのかについて，著者が自身の経験を元に書きつづっている．第1節では，熱帯雨林のさまざまな価値，機能について言及したうえで，その中でも見過ごされがちな，豊かな文化を創造し保持するという機能を強調している．第2節ではさまざまな土地利用形態について著者が自分自身の経験からたどり着いた熱帯雨林保全の方法について具体的に記述している．

以上，本書の概略を述べてきた．第 2 部 2 節の最後では，著者の代表的研究について紹介されている．植物の繁殖（受粉・開花・結実）周期は森林内の垂直構造（低木・亜高木・高木・突出木）によって傾向が異なることを著者は観察し，その傾向を花粉媒介者（ハナバチ・甲虫など）の行動様式によって説明したという研究である．この部分は専門分野が異なる人には少々敷居が高いかもしれない．しかし，第2部のここまでの記述を丁寧に追跡して読んでみれば，この部分の新たなおもしろさが見えてくる．それは観察・先行研究に基づいて仮説を立て，それをデータもしくは思考実験によって検証するという一連の研究プロセスをトレースしているということである．著者は第2部の1節と2節の前半の部分に記述されている情報と観察に基づいて，熱帯雨林における植物の開花と階層構造を説明する仮説を立てている．その仮説に基づいて一連の数理モデル（思考実験）を立て，実際に自分自身で取ったデータ（観察されたパターン）と比較して，自身の仮説を検証している．この研究プロセスについて著者は以下のように記している――多様性，意外性に翻弄されながらも，その中に法則性を見出し，さまざまなパターンを関連づけながら理解するための理屈を探し出すことは，熱帯雨林研究の楽しさの 1 つだろう――．

「熱帯雨林をなぜ保全するのか？」という問いに対して，熱帯雨林は豊かな文化を創造

し保持するのだから人間のために保全すべきであると著者はたびたび強調する．このような，これまで見過ごされがちだった，熱帯雨林の価値に焦点をあてそれを強調すること自体は新しい試みである．そして，新しい試みであるがゆえに，本書の主張が十分に説得的なものとなっていない部分がいくつかある．

本書ではまず，熱帯雨林を科学者・知的好奇心をもつ市民にとっては興味の対象であり，現地に暮らす人々，特に狩猟採集民にとってはかけがえのないものであるとしている．しかし，本書では狩猟採集民と熱帯雨林との関わりについてはほとんど言及されていないのが残念である．スマトラのマレー人について，多少なりとも狩猟採集的な記述はあるが，彼らは狩猟採集を生活の中心においているわけではない．

また，熱帯雨林の文化創造・保持機能は生物多様性によって生み出されるとしている．確かに，本書において熱帯雨林が豊かな文化を創造し保持しているということは，事例を元に説明されており，それは私も間違いのないことであろうと思う．しかし，本当に生物多様性がそのような機能を直接的に生み出しているかどうかということには私は懐疑的である．もし，生物多様性が豊かな文化を創造し保持するのならば，豊かな文化は生物多様性が高い熱帯雨林においてのみしか認められないということになる．極地，乾燥地などといった生物多様性が低い場所において豊かな文化というものが認められないことになる．はたしてそうなのであろうか．

上述の問題点を解決するにあたって多様性という言葉のとらえ方が重要なポイントになると私は考える．本書では熱帯雨林の価値を強調するキーワードの1つとして，多様性という言葉がたびたび使用されている．生物多様性という言葉は文字どおり生物の種数である．一方で機能群の多様性という言葉もある．本書の第2部4節で機能群とは「環境に対して似た反応をする種の集まり」と定義されている．機能群とは，何かの基準に従ってグループ分けしたときに似たような性質・機能をもつものの集まりである．したがって，機能群とは「人間に対して似たような機能を発揮するものの集まり」と定義することもできる．本書でも，しばしば多様性という言葉が機能群の多様性という意味で使われている．

この機能群の多様性という言葉は，本書を位置づけるにあたって非常に重要であると私は考える．しかし，極地・乾燥地といった生物多様性が低い場所においても，機能群の多様性があれば，人間と自然環境の関わりにおいて豊かな文化は育まれているはずである．上記のように，機能群の多様性という言葉を意識することによって，本書で強調されている豊かな文化を創造し維持するという熱帯雨林の機能は，熱帯雨林だけでなく他の環境においても適用可能なものとなる．同時に，熱帯雨林の価値が他の異なる環境と比較可能になるのである．これは，熱帯雨林固有の文化創造機能を突き詰めるうえでも有効な操作概念となるであろう．

熱帯雨林には遺伝資源の宝庫，治水，地形維持などといった機能がある．それらの機能

と比較して文化創造機能は目に見えにくく，評価も未だ発展途上である．一方で，文化創造機能だけでなく，熱帯雨林の保全について考えを巡らすことは熱帯研究者の責務であると考えられる．したがって，本書は熱帯の保全について考える材料の1つとして熱帯研究者必読の書と言えよう．

引　用　文　献

清水建美．2001.『植物用語事典』八坂書房.

（嶋村鉄也，京都大学フィールド科学教育研究センター）